

対人的接近－距離化スキルの発達

○宮本正一

(岐阜大学)

キーワード：社会的スキル、距離化スキル、発達

Development of interpersonal approaching/distancing skills

Masakazu Miyamoto

(Gifu University)

Key Words: social skill, distancing skill, development

目 的

人間関係の希薄化が指摘されている現在，対人関係の発達・育成については以前にもまして強い関心をもたれている。社会的スキルの従来の研究には，ネガティブなコミュニケーションスタイルをとること、距離をとることについては，初めからスキル不足・不適切な行動と片付けられ，その適応的な意味やそれ自体をスキルとして扱うことについては特に注目されてこなかった。しかしネガティブコミュニケーションをも考慮する方が社会的適応を考える上で重要である(石井, 2006;2007;2011)。

本研究では，小学6年生、中学1年生、中学2年生、中学3年生を対象に質問紙調査法を用いて以下のことを検討した。生徒自身が自分に害悪を及ぼしてくるであろう相手との関係性においてどの程度，対人的接近－距離化スキルを行使するのか。また自分に害悪を及ぼしてくるであろう相手との付き合い方におけるスキルというものは発達していくのか，そして男女差はあるのかということを検討した。

方 法

被調査者：岐阜県内の小学6年生および、中学1,2,3年生、合計361名。うち有効回答者数は合計319名（男子162名、女子157名）を分析対象とした。

調査用紙の構成：

石井（2007）の「メタ・ソーシャルスキル尺度」から「接近スキル（表出スキル）」6項目、「距離化スキル（非表出スキル）」8項目の中からそれぞれ5項目ずつ選んだ。

それぞれの項目に対して、相手が友人の場合、相手がA「問題児」の場合、相手がB「いい子」の場合を想定させる人物を描写する文章を提示した。そして3種類の相手に対して、それぞれ上記の合計10項目の質問について、「1. 全くしない」「2. あまりしない」「3. たいていする」「4. いつもする」の4段階で評定してもらった。

実施期間：2011/09/14～2011/10/28

結 果

因子分析

本研究においては石井（2007）の「対人的接近-距離化スキル尺度」（大学生対象）からいくつか項目を選択したものを使用して調査した。小・中学生にそのまま適用できるかどうかを検討するため、スキル行使の対象別に因子分析を行なった。その結果、友人やB（いい子ちゃんタイプ）に対しての因子構造因子構造は「接近スキル因子」と「距離化スキル因子」という2つに分かれた。A（自分に害悪を及ぼすであろう相手）に対しての因子構造は「接近スキル」と「距離化スキル」とその2つが混在する「自己主張スキル因子」という3つに分かれた。

ここでは「距離化スキル」の発達差・性差について因子得点の変化をスキル行使の対象別に図1から図3に示した。

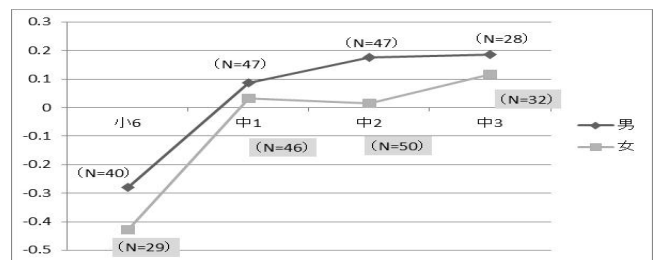


図1 友人に対する距離化スキルの性差・発達差

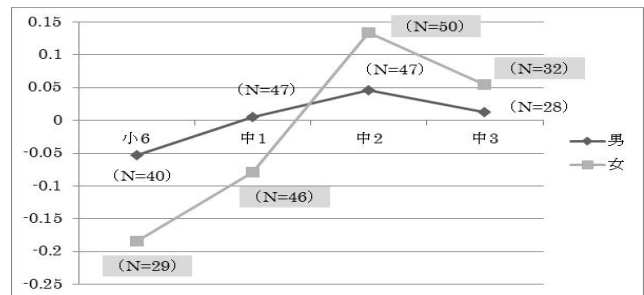


図2 A「問題児」に対する距離化スキルの性差・発達差

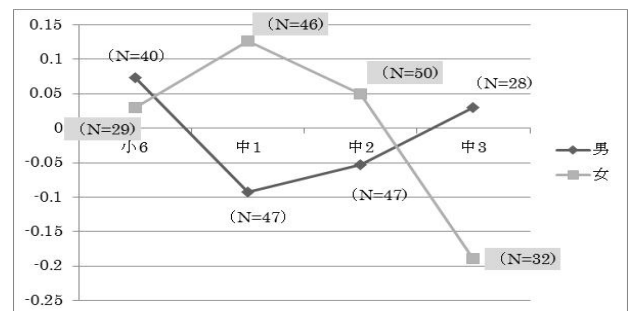


図3 B（いい子ちゃんタイプ）に対する距離化スキルの性差・発達差

考 察

図1の友人に対する距離化スキルは学年×性の二要因分散分析(と下位検定)の結果から、中学生は小6よりも得点が高かった。図2のA「問題児」に対する距離化スキルと図3のB（いい子ちゃんタイプ）に対する距離化スキルの性差・発達差は両者とも見られなかった。

その他の結果を総合すると、小学校高学年にもなると相手が自分にとってどのような影響を及ぼしてくるか、ということを考えて、相手、状況、場面によって、適切なスキルを選択し、行使できるようになっていくと考えられる。(本研究は岐阜大学教育学部平成23年度卒業生水崎千佳との共同研究である。)